京都国立博物館蔵『近世珍話』翻刻

同志社大学法学部竹本知行研究室内京都幕末文書研究会
（堤宗男・赤尾博章・岡部恒・村上繁樹・竹本知行・宮川禎一【順不同】）

『近世珍話』（解題・竹本知行）

文久三年、長州藩は「八月十八日の政変」で京都を追われ、また六月の池田屋事件で多くの有為の志士を殺害・捕縛されたことで、京都政局における攘夷の「本山」としての地位を完全に失った。それでも同藩は失地回復の機会を狙い続け、元治元年、益田右衛門介・福原越後・国司信濃の三家老が、朝廷への嘆願を名目に藩兵を率いて上洛した。長州藩兵は、山崎天王山・嵯峨天龍寺・伏見長州屋敷にあって、あたかも京都を包囲するかのように約一か月間布陣し続けた。その間、藩主親子の冤を朝廷に訴え続けたが容れられず、ついに七月一九日、迎撃準備を整えた会津・薩摩ほか諸藩兵との間に戦端が開かれた。

京都の中心部での激戦によって発生した火事は、のちに「どんどん焼け」と呼ばれた猛火となって京都市街を焼き尽くした。火災発生の原因については、しばしば撤退する長州藩兵が河原町・二条の同藩邸を放火した

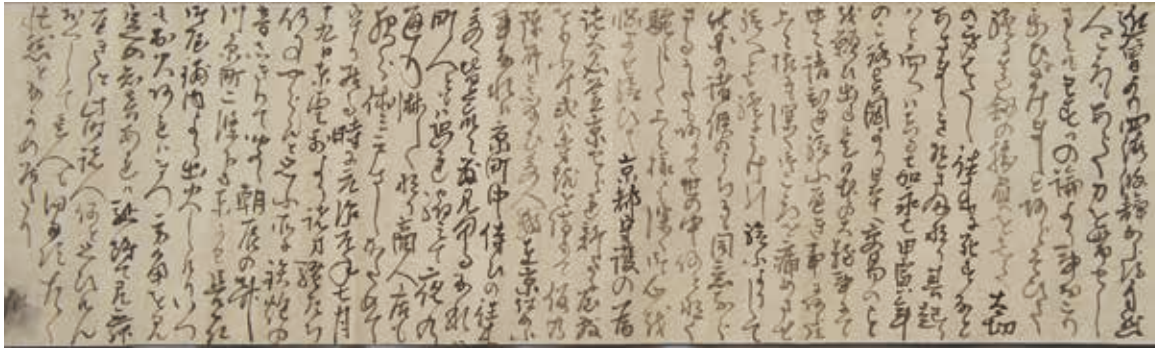
ためとされてきたが、今日では、長州藩邸の周辺が焼け残っていることや、長州藩邸制圧を狙った薩摩藩兵が寺町・御池の本能寺を砲撃して炎上させていること、さらには長州藩士が哀訴のために押し寄せた鷹司輔熙前関白邸に会津・薩摩藩兵・一橋慶喜の手勢・新撰組が砲弾を撃ち込みそれを炎上させたことなど、長州放火説を疑問視する見解もある。

出火原因がいかなるものであったにせよ、禁門の変に起因する「どんどん焼け」は京都の市井の人々の生活を破壊した大規模な災禍であった。この様子を庶民の視点から絵に描いた史料が今日いくつか存在する。その代表的なものが京都大学付属図書館所蔵の『甲子兵燹図』である。これは品川弥二郎によって設立された尊攘堂の史料であったものが京都大学に引き継がれたものであるが、前川五嶺の文絵を後に森雄山が写したものとされる。「甲子」は元治元年の干支表記、「兵燹」とは戦争による火災のことを指す。

ここで、紹介する京都国立博物館所蔵『近世珍話』（慶応三年・一八六七年）は、前川五嶺が制作した小型の三巻の絵巻である。これは長く京都国立博物館の収蔵庫に眠っていたものであるが、二〇〇一年の同館の独立行政法人への移行に際して行われた収蔵品リストの作成作業の中で宮川禎一氏によってその存在が確認された。上・中の二巻は禁門の変の様子を描き、その内容は明治期に描かれた『甲子兵燹図』に類似しているが、下巻は慶応二～三年の京都の世相を描いている。上巻では幕末の騒々しい世相について、「其起りハと伺へハ去る嘉永七甲寅年のころ異国より日本へ交易のことを願ひ出る」と述べるなど、当時の市井の人々が幕末世情不安の原因をペリー来航による「開国」と理解していたことを示している。また、下巻に描かれた「ええじゃないか」の描写は、騒動の発生から拡大に至る実相を今に伝えるビジュアル史料としても貴重である。

翻刻は同志社大学法学部竹本知行研究室内の京都幕末文書研究会（堤宗男・赤尾博章・岡部恒・村上繁樹・

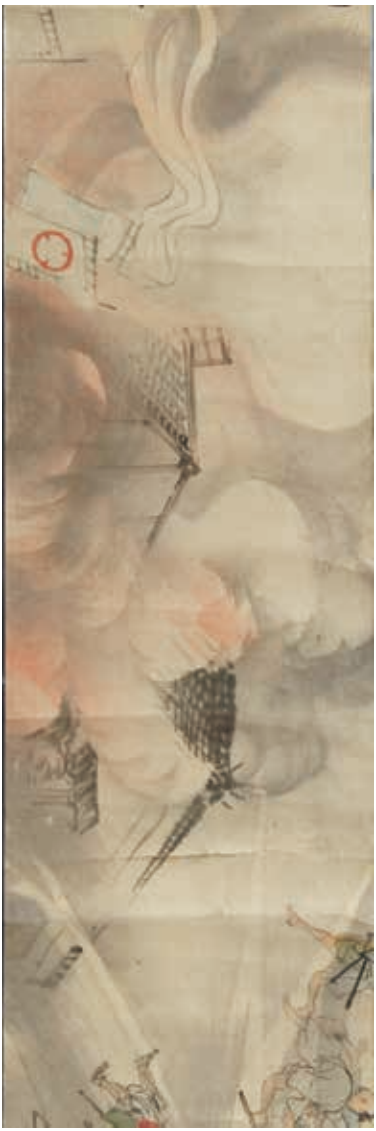
竹本知行・宮川禎一【順不同】）によるが、表記にあたっては読みやすさを旨とし、仮名の清濁を整え句読点等の記号を適宜付した。また、本文書中には差別用語として今日では使用を差し控えるべき表現が数箇所にわたって見受けられるが、歴史文書としての性質上あえて原文のままとしている。



翻刻　『近世珍話』京都国立博物館蔵

近曾より四海波静ならず自然
人こゝろもあらく刀を帯せし
方々もわずかの論より事おこり、
互ひにまけまじとあらそひて
終に真剣の勝負をして太切
の身はたし往来に死すなど
あさましき有さまなり、其起り
ハと伺へハ去る嘉永七甲寅年
のころ異国より日本へ交易のこと
を願ひ出る、是日本の大難事にて
中々請ひき給ふべき事にあらず
上々様にも深く御こゝろを痛めさせ
給へども終にうけ引給ふよりして
此国の諸侯のうちにも同意なら
ざるかたもありて世の中何となく
騒々しく上々様にも深く御心を
悩ませ給ひて京都守護の為
諸大名登京せられ新たに屋敷
をもふけ或ハ寺院を借りて仮の
陣所とし給ひ多人数在京仕給ふ
事なれハ京町中侍ひの往来
多く皆荒々敷見ゆるなれハ
町人どもハ恐れ縮ミて夜の
通行淋しくなり商人店も
夜分休ミ戸さしかためて
守り居る、時に元治元年七月
十九日東雲前より諸方騒たち
何事やらんと思ふ所に鉄炮の
音しきりて聞へ朝辰の刻
川原町二條下る東がわ長州
御屋敷内より出火しけり、いつ
も出火あれハまづ方角を見
定め知者あれハ駈附て見舞
べきに此時諸人何と思ひけん
おくして壱人も向わずたゞ
忙然とながめ居たり

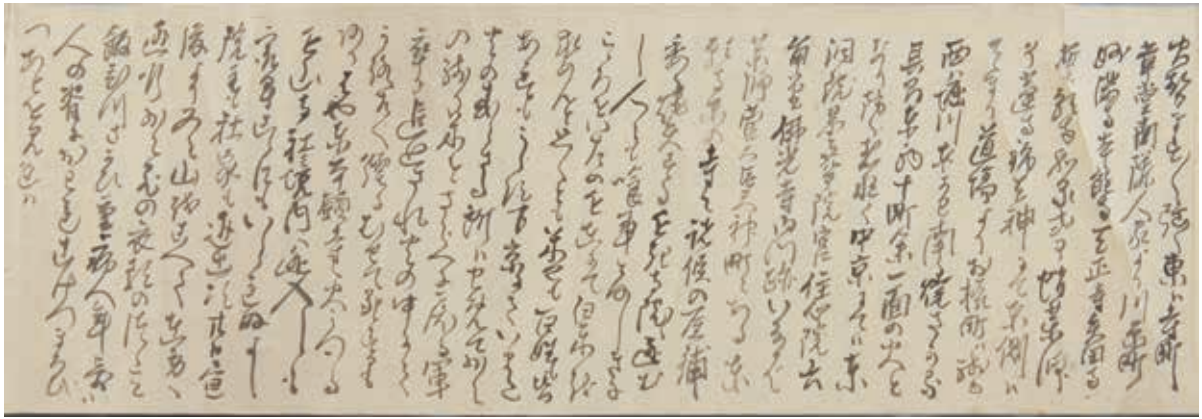
嵯峨天龍寺、山崎観音寺、
伏見屋敷、京川原町屋敷、夫々
長藩之多人数皆一時に駈走り
禁裏御所江乱入之体、御かための
諸侯すハ大変起りしと寺町
清和院御門、堺町御門、中立売
御門、其外御門々ニ諸軍内外
に発向していらんとする軍勢
をさゝへ鉄炮にて打払ふうたれて
退くを追かくる町家へ逃込軍
卒を大筒を発して家共々に
打砕く、忽黒煙ともへ上る中立
賣御門前、烏丸通南へ長者町、
下立賣、樋木町、丸太町通東へ
堺町御門前鷹司殿御殿、大筒
打こミ町家東へやき払ふ鉄炮
の玉飛適ふ事雨よりしげく
流れあたりて死する者数をしらず
町人と珍しき事に思ひうか〳〵
見物に行もあり



同日昼過る頃弐百人計りの軍勢
東洞院下より五条或ハ堺町を上へ
登るまた上より下る軍卒皆々
よろい、軍笠、はら巻、ぬき身の
鑓、はた印、其中に手おひもあり、
大筒の車を四つ五つも
ひき来り往来の者に
是をひケといふ
ひかねハ抜身の
鑓をつきつける
よぎなく是を
恐る〳〵引き行
上邊の火勢追々
はげしくはや
六条近くもへ
下る

上邊より逃返る人々又品々を持て
下へ〳〵と逃来り諸道具を預り
呉といふをきけハ迚も京の町にハ
居られぬはや二条より下へやけ
来るといふ、土蔵ある者ハまづ
蔵へ運ぶ、蔵なきものハ風呂
敷包ミにして人をたのめども誰も
来るものハなし主も妻も荷を
持ちて逃出す行方もあてとも
考なし、先東西の山近く
寺院神社を心ざし、
申の刻より夜に
いれど桃灯さへも
とりあへずうろたへ
廻つて逃出る

其夜ハ何方にて寝る
といふ積りもなくたゞ
あてとなしに逃行ける



火勢ます〳〵強く東ハ寺町
革堂南隣人家より川原町
妙満寺、本能寺、天正寺、矢田寺、
誓願寺、和泉式部、蛸薬師、
了蓮寺、錦天神にて東側ハ
とどまり道場よりお旅町ハ残る
西ハ堀川東がわ南へ焼さがる
其間東西十町余一面の火と
なり防ぐ者なく中京にてハ東
洞院曇華院宮、住心院、六
角堂、仏光寺御門跡、いなば
薬師、菅大臣天神、町ニある本
願寺末の寺々諸侯の屋鋪
悉く焼失する、近き寺院へ逃出
し人々も喰事とぼしきに
こころをいため近在にて白米を
求めんと思へども米やも百姓も皆
あれどもうらず下京にていまだ
火の来らざる所ハセめて少し
の残り米をさらへに戻る、軍
卒に追廻され火の中にて
うろたへ煙にむせて死するも
ありはや東本願寺へ火うつる
近山寺社境内へ逃入しも
最早ここにもいられぬよし
院主も社家も逃出す、廿日昼
後より又々山をこへて在方へ
逃行少し宛の衣類のつつミ
飯ひつさかひ重病人年寄ハ
人の背におわれ、こけつまろび
つあとを見返ハ

慶応戊辰春
六十三歳五嶺画

「竹林院峯譽浄覚居士」と
書かれた紙片が箱に入っている

写真は箱に三巻が納められている状態

（茄子の絵）
巻（下巻）　縦十七．五　横四六〇．五
鷹の巻（中巻）　縦十七．四　横五〇九．〇
富士巻（上巻）　縦十七．五　横四七七．二

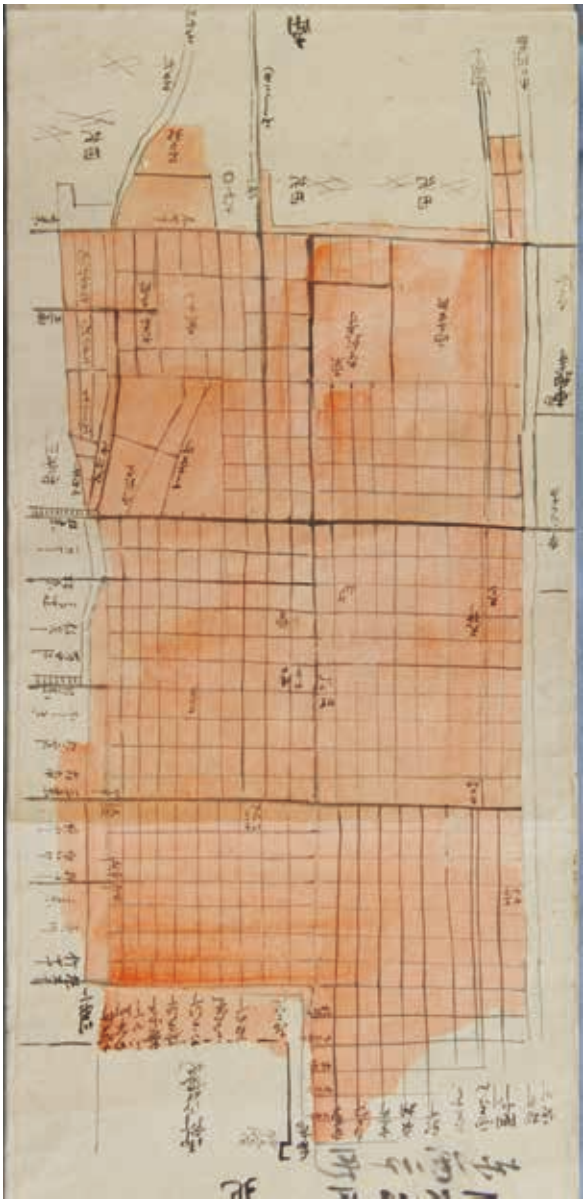
子ハ親にはなれ親は子をうしなひ
さがしもとめる事もならず、病人
産婦戸板に乗せ途中にて
子をうむもあり死するものもあり
漸々寺院の門前、宮の拝殿、百姓
の軒にむしろをかりて其夜を凌
ぐ、こらへがたきハ喰事にて、やうい
とてもあらハと屯やう〳〵ひつに
残りし冷飯を少しもわかち
其夜をしのぐ明れハ廿日

七月廿二日朝漸く火鎮り、せめて
の事に灰かきして少しの物と
て掘出さんと家内娘連たちて
我家のやけ跡、爰ハ臺所、ここハ
座鋪、ここハ佛壇、ここハたんす、此
邊ハおし入、やけし瓦をかきのけ
て掘れども〳〵かたちもなし
鍋釜、あぶりこ、かな板セ、わさび
おろし、火ばし、おきかき、鏡、其
外のかね道具ハかたちハあれど
ぼろ〳〵と役にたつ品一品もなし
我家の境ひ、かこひ
する板も竹も中々に
近邊にハ何屋もなし
ほんの見切のかり
かこひ縄を引はり
かわらをつミ
暑さこらへて
日の入まで、井戸
入置し物出して
見れバ半こげ
ぼろ〳〵と残るに
甲斐なき有さま
なり、湯を遣ふべき
たらいもなけれハ井戸へ
かかりて水をあび
焼残りたる川東、堀川
の西、親類近付寝所を
頼ミ遠きハ西山東山朝夕
ちり取、くわ、ほうき、つまらぬ
顔してかよひけり

火鎮まつて町々に討死の侍士衆
よろひ着したるもあり、又陣笠、
陣羽織、袴ばかりもありて何国の
だれとも知る人もなし中にハ
首のなきも多し、廿四日まで
日に晒し暑気にくさりて其
にほひ絶がたきを車に積ミて
東山鳥辺山の辺に埋む、いか成
人の果やらん天罪を蒙る人
なるべし

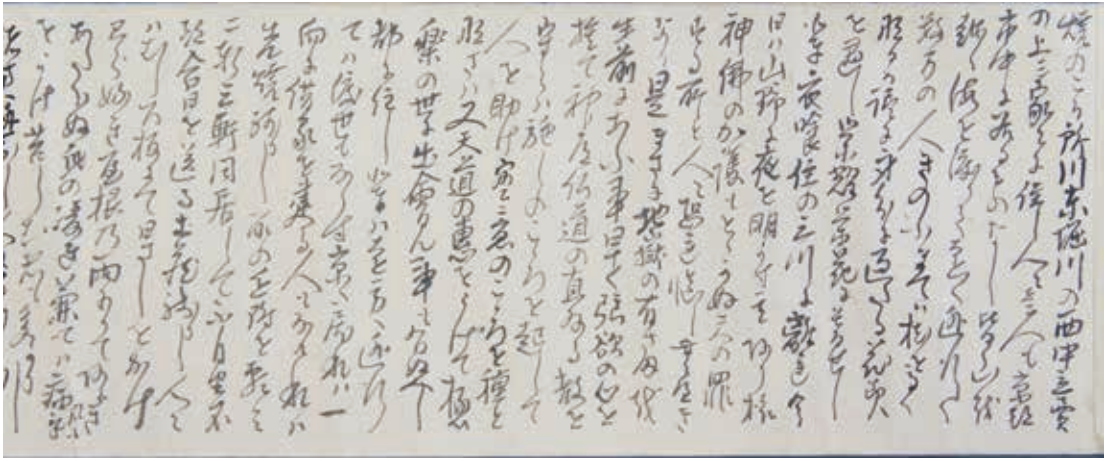
十九日朝より
廿二日暁まで
焼はてし町数八百十一町
竈の数二万七千五百十三軒
落土蔵千弐百七ヶ所
宮門跡方三ヶ所
寺社二百五十三ヶ所
塔頭九十五ヶ所
芝居二ヶ所
橋数四十壱ヶ所
非人小屋壱ヶ所　ゑた村三ヶ所

南北三十町
東西二十町

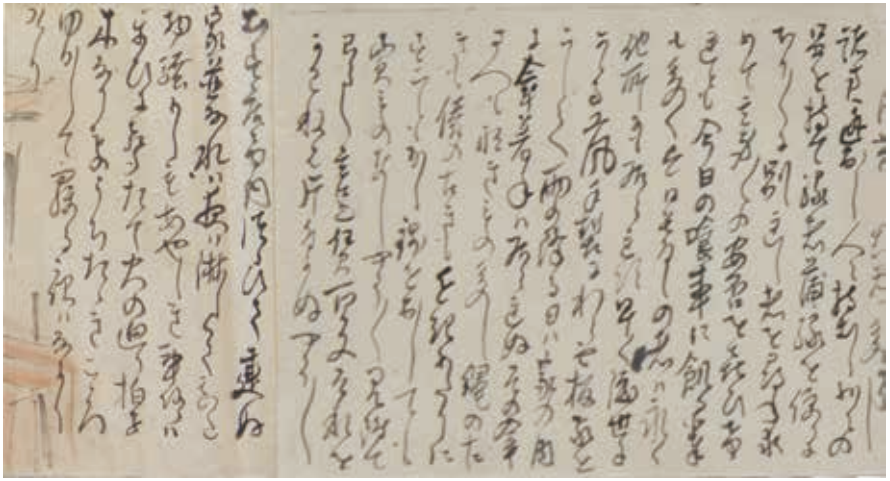


廿日夜ハまた山越へて、若狭、丹波、
大津、伏見、だいご、宇治、東江州、西
江州大津に住する人々も船にて
逃る、山へ行きのふ迄ハ何もしらず
あむきに暮せし人々も今宵ハ
野山海上に寝もやらず廿一日ハとて

京都国立博物館蔵『近世珍話』　翻刻



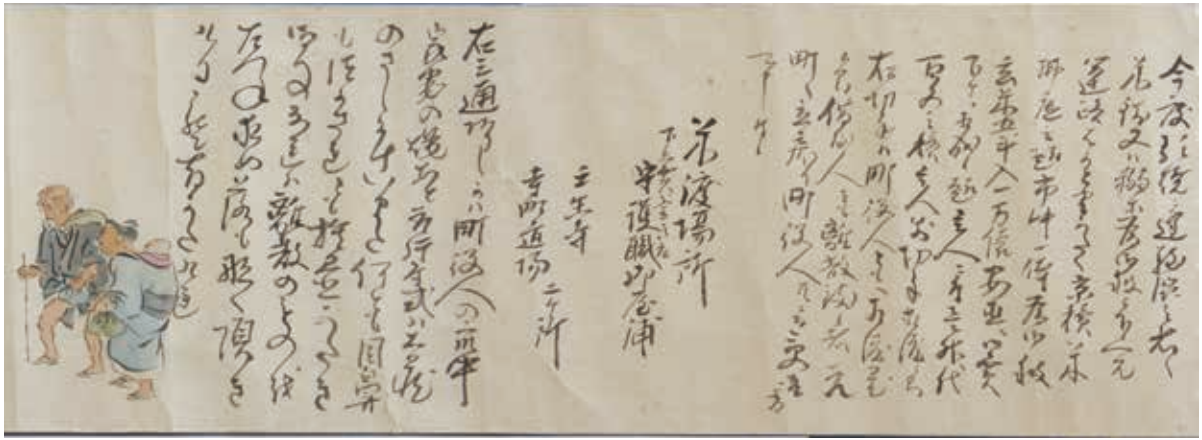
焼のこる所川東、堀川の西、中立賣
の上ミ、家々に住し人々壱人も京都
市中に居るものなし皆山を
越へ海を渡りて遠へ逃行く
数万の人きのふまでハ枕を高く
なるが俄に身分に過たる花美
を過し栄耀栄花に暮せし
輩、衣喰住の三つに離れ今
日ハ山野に夜を明かす其あり様
神佛の加護もとどかぬ天の罪
する所と人々恐れ慎しむべき
なり、是まさに地獄の有さまを
生前にあふ事早く強欲の心を
捨て神道仏道の直なる教を
守らハ施しのこころを起して
人を助け實意のこころを種と
なさハ又天道の惠をうけて極
楽の世に出会ん事も有ぬべし
都に住し輩ハ遠方へ逃行
てハ渡世もならず、京へ戻れハ一
向に借家を建る人もなけれハ、
先焼残りし所の近附を頼ミ
二軒三軒同居して不自由不
都合日を送る、土蔵残りし人々
ハむしろ板にて日さしをかけ
わらふき屋根の雨もりて、あらき風も
あたりぬ身の凌き兼てハ病気
をうけ苦しむ者も多かりし



諸方へ逃出し人々持出し少々の
品を持て縁者蒲縁を便りに
ちり〳〵に別れし者を尋ね求
めて其身〳〵の安否を喜びけ
れとも今日の喰事に飢る輩
も多く今日暮しの者ハ永く
他所にも居られず早々渡世に
かゝる、庇手製にわらや板家と
ニして雨の降る日ハ家の内
に傘着ねハ居られぬその傘
さへもなきもの多し、縄の古
きも俵の古きも近きあたりに
すこしもなし銭を出しても
賣ものなしやう〳〵見附て
わらじ壱足賃百文それを
かわねば片付かぬ、やう〳〵
出す店々や内つづひて建ぬ
家並なれハ夜ハ淋しくて甚だ
物騒、もしもあやしき事あらハ
互ひに聲たて火の廻り拍子
木なりものうちたたき、こころ
ゆるして寝る夜ハなかり
けり

京都国立博物館蔵『近世珍話』翻刻

いつ安穏の世となりて元の都と
なり戻りもとの住居にくらす
やらと、こゝろもつかれ身も痛れ
元よりなやむ老人ハ他家にかかりて
病気になやミ果行ものも
多かりし是皆前生同縁
にてあらん、されど家のうち
にて死するハ行倒れるとハ
ましなるべし
御上様より諸人極難渋を思し
召れて此度、従
御公儀様町々江安心すべき
御触出され多くの者へ施行
御米を下され候事
御高札之写
五条橋詰
三条橋詰



今度類焼ニ逢難渋之者へ
米銭又ハ粥等為御救被下候へ共
運路はかとりかたく京積米
拂底之趣市中一体為御救
玄米五斗入一万俵安直ニ御賣
下ケニ相成候趣壱人ニ付一升代
百文之積壱人別切手相渡候間
右切手ハ町役人ともへ相渡置
候間借屋人とも離散致候者元
町へ立戻り町役人共ニ而受取方
可申付候

米渡場所
下立売釜之座
守護職御屋舗

壬生寺
寺町道場　二ヶ所

右之通ありしかハ町役人の衆中
家竈の焼あと取片付或ハ土蔵
のさしかけ、いまだ何とも目鼻
もつかざれども捨置がたき
御事なれハ離散のものを
たづね求め落もなく頂き
ける能々有がたけれ

翻刻　『近世珍話』　京都国立博物館蔵

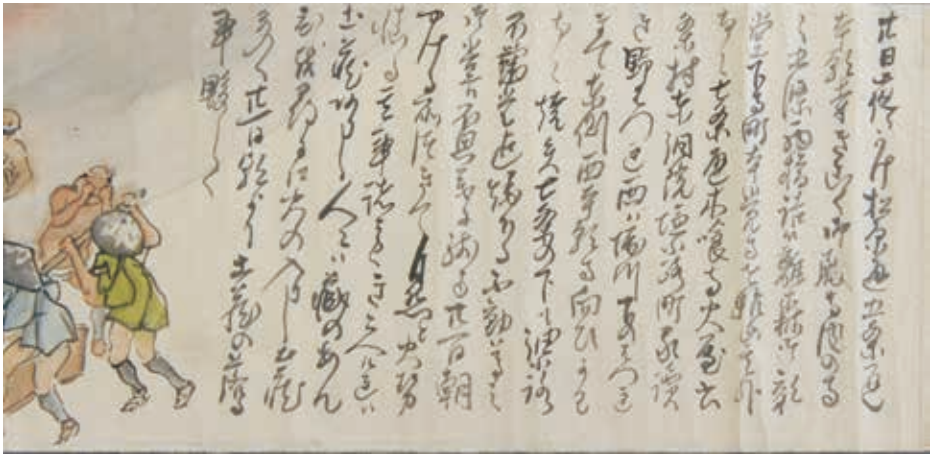
十九日の夜あわれいじらしき事共
あまたあり烏丸五条の邊に
住ける人夫婦に子供両人、兄は
十五才妹七才、兄ハ疫病にて歩行
ならず父親ふとんに
つつミ背おひ、妹ハ
母親背におひ、少し
のものを風呂敷に
つつミ、先西寺町
宿坊へ逃行彼の
病人おろし皆々
休ほうするうち
所へ屋鋪を逃
出し御大名皆々
寺をかすべし
といふ、是非なく
ことわる町人ども
皆此寺を出され
て又ちかくに
出て行、彼病人
つれし人も
さしあたり
行べき方も

なけれハ二条新地の東に主人の
宿坊あるを思ひ出し、それより
御所より北江廻り、かも川を東へこへ、
かの主人の宿坊を頼ミ漸々病人
を背よりおろしけれハはや息
きれて死し居たり、又松原通
室町邊にて母親娘両人、此娘
腹体にてありしが途中にて
出産し、前だれしき地上へ
産落し其まゝ包ミて、はは親
ハふところへ入、娘の手をひき西へ
とはしる、娘歩行ことかなわず
ただ引ずつて行うちに道
にて娘息絶へたり、又五条坂に
古く住ける人、陶器を作る人
なりしに七十才にあまる父親
其ころ病気なりしを戸板に
のせて孫の伜と弐人して
鳥邊山通妙寺宿坊なれハ
臺所迄かき込おろし
けれハ息絶たり
住僧ハはや逃て
寺に居ず伴僧
を頼ミ何卒何れ
へなり共埋ミ呉と
たのめハ伴僧いふ
さやうのことにハ
かかつて居られぬと
はや逃出る其所を
むりにとらへて鍬を
かり、明地をほりて親父を
埋め土をおほふて
回向をたのめハ坊主の役とて是
斐なくも、しばし念じて逃出すに

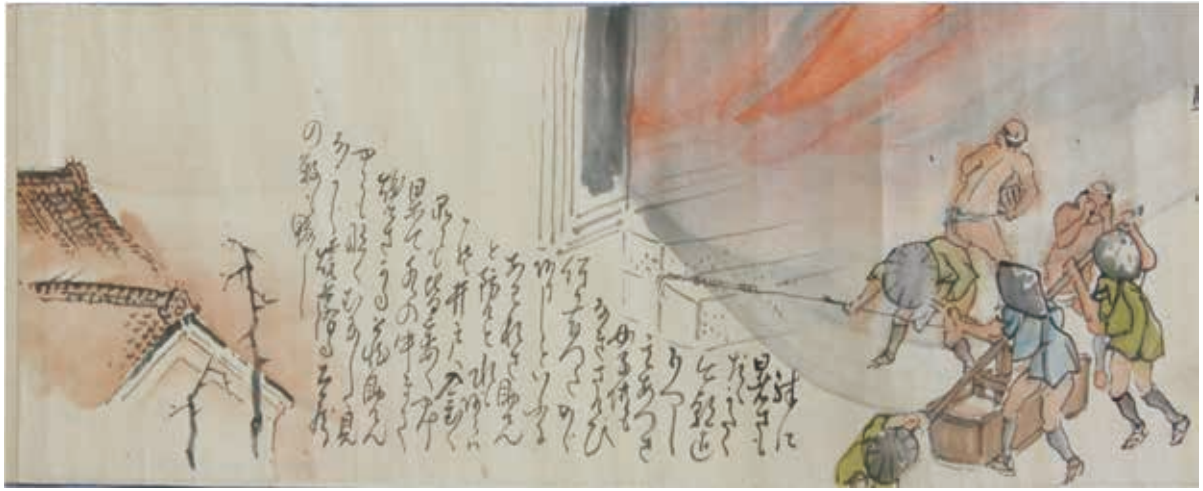
（注＊絵はおひねり）

有あふ金子を紙に（ひねり）伴僧の
ふところへねぢ込めハ是ハ御町
噂といふ侭に尻をからげて出て
行、其外前夜に産し子をい

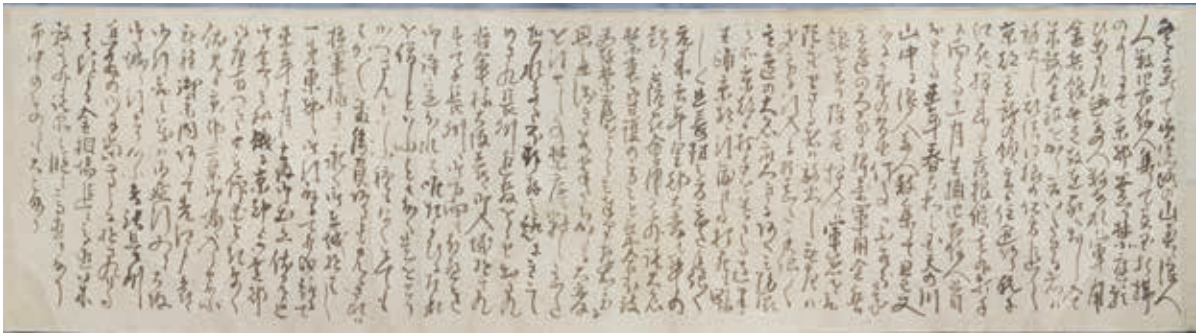
だき、きのふ死たる者を棺箱にいれ桶に入れて逃行など
その類夥しくかき盡されす
正しく知る人のミをしるし置く
八月上旬になれハそれ〳〵にまづ居所を定めんと思へども
作事も手傳も皆同様に我家〳〵、住所中々来るけしきもなけれハ漸近在の百姓衆を
頼む、木蔭に雨もれて日和になれハ藁やむしろの其上へ、やけた瓦を乗セおけども大雨降れハ屋根なきも同やう、二帖敷三帖敷の縄からミ板やね枕皮所々に穴ありて月の影さす秋風も枕にもて防ぐ屏風もあらばこそ夜なき蕎麦やの聲もセず昼泣く人々寄合ふて晩茶ぬくめてセんべふとん引ばり合ふて焼あとに



廿日夜へかけ松原通、五条通
本願寺、きこく御殿、寺内の寺
々、五条西橋詰に籬森、御影
堂、下寺町本覚寺を始め其外
寺々、七条通、木喰寺、火屋、六
条村、東洞院、塩小路町家續
き野はづれ、西ハ堀川下のはづれ
まで東側、西本願寺向ひがわ
寺々焼失、七条の下も油小路
不動堂迄焼下る、不動尊之
御堂ハ不思義に残る、廿一日朝
やける所つきて自然と火勢
慎る、其事諸方へきこへル迄ハ
土蔵ありし人々ハ蔵のあん
ぴを尋るに火の入りし土蔵
多く廿一日朝より土蔵の落る
事夥しく

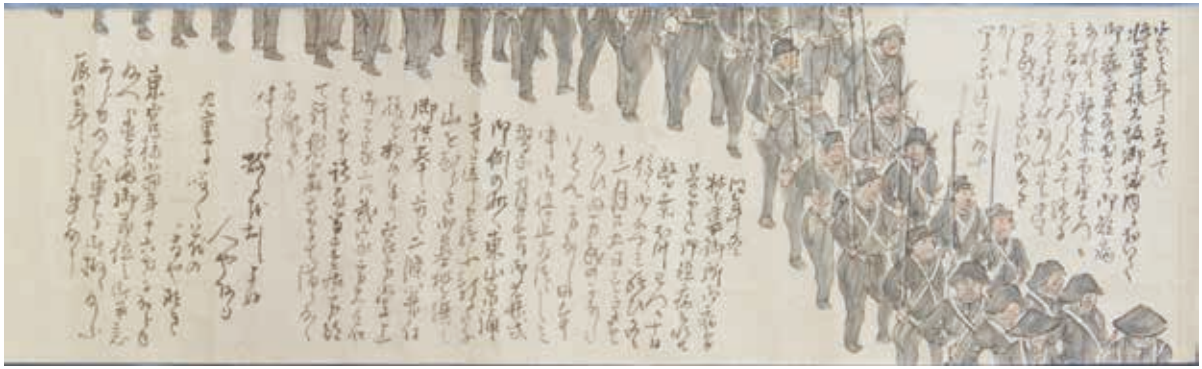


誠に
　暑さも
たへがたし
　今朝迄
もへし
　其あつさ
　女子供も
なきさけび
行かう人々、かぐ
　ありしといふに
　あわれさ助けん
と防けど水もあらハ
こそ井戸へ入置く
　品々も皆悉くやけ
　　果て水の中まで
焼けさかる蔵助けん
やうもなく、むなしく見
　ながら焼落る土蔵
　　の数も夥し



冬に至りて美濃路の山奥へ浪人
人数四百余人集りて異国打拂
のよしにて京都へ登り禁庭へ願
ひ出され趣多人数なれハ軍用
金、兵銀無之故、在家へおし入て
米穀金銀をかり取いたさる者ハ
放火し乱法同様の仕方追々
京都へ其所の領主より注進あり既に
江州へ押来る、彦根侯其外打手
に向わる十一月生捕四百余人首
おとる、丑年春大和之国天の川
山中に浪人多人数集りて是又
なにか届の有由、何事か不相分是も
其邊の大家に押寄軍用金兵
銀をとり陣屋へ押入てハ軍器を取
随身セさる者ハ放火し毛左は
身方に引入る抔甚だ手強く
其邊の大名衆大きにあぐミ難渋
之所京都より打手を遣さる過半
生捕京都へ引渡さる討死も夥
しく且長防之方甚だ手強く
元来去年皇都大変も事の
起りハ薩州会津其外諸大名
禁裏守護の方々と気合不致
夫故禁庭をうらミ奉り左右方に
思慮浅き若輩たちかゝる大変
を行セし事禁庭へ対し甚だ
恐れ多き不所存之趣にきこし
めされ長州進発をゝセ出され
将軍様大坂表へ御入城遊され
すでに長州へ御下向も有べき
御評定なれば唯たがひにたれ
を憎しといふこともなく是をとり
かへさんといふ種もなくとても
はか〳〵敷勝負ありとも見へされハ
将軍様にも永く御在城遊ばし
一先東都へ御引取に可相成趣にて
丑年十月大坂御出立伏見迄
御登り之所俄に京都より御登都
御座有べき由被仰出よぎなく
伏見より京都二条御城へ入らセ給ふ
無程御参内ありて先江戸表へ
御引取之義ハ御延引又々大阪
御城へ引とり給ふ矢張長州
進発の御事当専しに遊されける
其頃より金相場追々高直、米
穀其外諸品々段々高直になり
市中のものども大こまり

今年唐土より象の子壱疋、
虎壱疋京都へ来る、則寺町
道場境内におゐて諸人に
見せけるに珍ら敷ものにて
虎ハ鉄の牢箱に入て不出、鉄の
棒をさし入るとうなり声を出す、
象ハすなをにて、口上言のあとに付
敷庭へ出、わらをやれハよくそろへ
はかまをさけて是を喰ふ、誠ニ
鼻の自由成しか是妙なり
　背高さ九尺餘
　はなの長さ四尺餘
　目方
虎ハ大きさ女牛の如し



寅之年ニ至りて
将軍様大阪御城内において
御病気差おこり御短病
なれ共医薬不届、はつか
之間御わづらひにて終に
かくれさせ給ふ、是迚も
万民のうれひ御なき
がらハ
関東送らセ給ふ

同年冬
禁裏御所御病気
是また御短病なれ共
醫薬不叶、わづか十日
餘り御なやミ給ひ冬
十二月廿五日すぎ去セ
給ひぬ、万民のかなしミ
いわん方なし日本
中御停止相つつしミ
翌正月廿七日御葬式
御例の如く東山泉涌
寺へ送らせ給ふ、新たに
山をひらき御墓地を撰ミ、
御供奉之方々二條関白
様を初め奉り宮方、堂上、
御公家衆、武家方大名、
はた本、諸家留守居方と
て行列厳重にて滞りなく
相済けり
　中々に散るをおしまぬ
　　人やある
　九重に咲く花の
　　香やなき
東宮様当年十六才にならせ
給へハ直さま御即位之御用意
あらせ給ひ専ら御拵へ給ふ
辰の年と申事なり

寅の年にいたりて米穀其外の
品々も追々高直、万民難渋に
及びけるを御上様より色々
御心配あらせ給ひ、御かこひ米を
粥にたきて貧人にあたへ給ふ
又有志の輩ハ差加へを願ふて
米代金を施す、其粥たき場
京中にて六ヶ所毎朝八ッ時より
粥をたく、壱人前に五合も朝ニ
頂きに来る者凡三千三百餘人
米数三石五斗づつ壱ヶ所の粥
なり、近き町々の老人又ハ手残り
の人々毎日〳〵世話に出る、九月
十一日より初り翌卯年三月十日
迄日数のま、正月ハ三ヶ日
七日十五日之分、壱人分に小もち十
づつ、箸壱ぜんはし紙にいれて

下されハ難渋人とも
落涙して有がたく
いただく

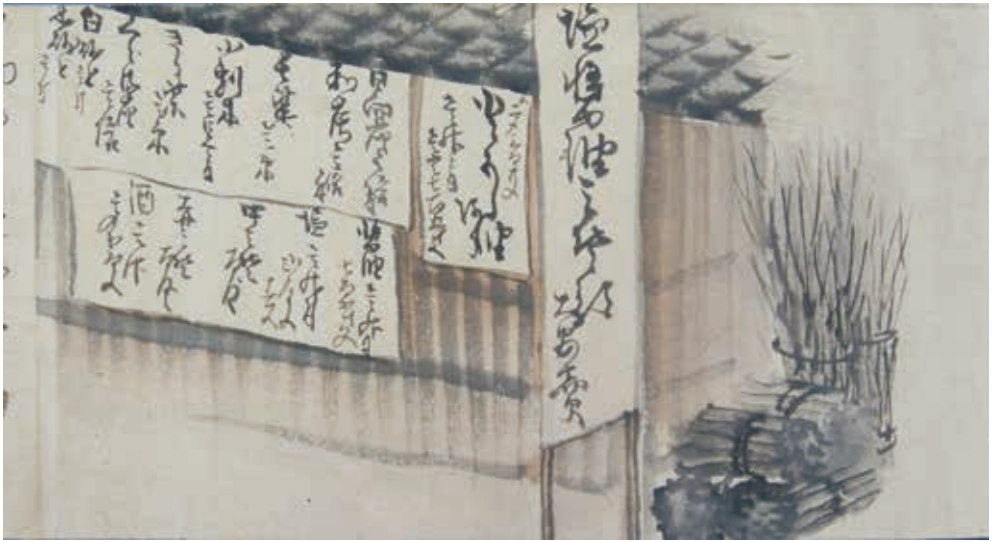
辰の年頃より大坂にて異国
作りの蒸気船出来て其
大きさ巾三間半
長さ七間も
あらん、乗船
の人数凡
三百人も乗りて、
朝五ツ時出て
昼過伏見へ
着く

下り舟も
右に同じ

上むきあり
白米雑こく
小うり

小豆
大豆
上餅
丹波黒
ゑんとう
上麦
白ゑんとう
江州米
そら豆
山城麦
四国米

翻刻　京都国立博物館蔵『近世珍話』



塩醤油ミそ類
大安賣

ともし油
あり
壱升ニ付
壱貫七百五十文

日向炭 壱俵
ニ付
醤油壱升ニ付

和炭 壱俵
ニ付
塩 壱升付
弐百文

長柴
壱束
中ミそ
百匁

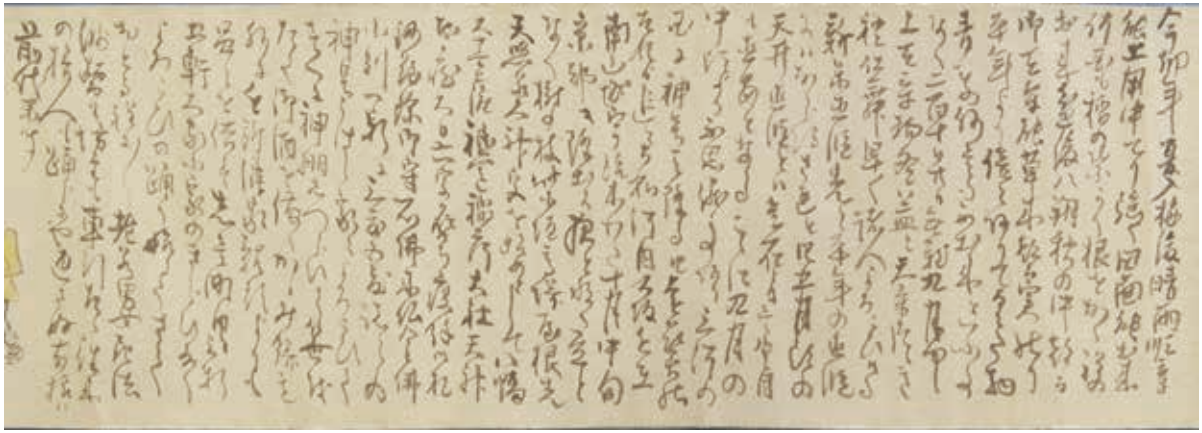
小割木
壱足ニ付
赤ミそ
百匁

きり柴
壱束
酒 壱升

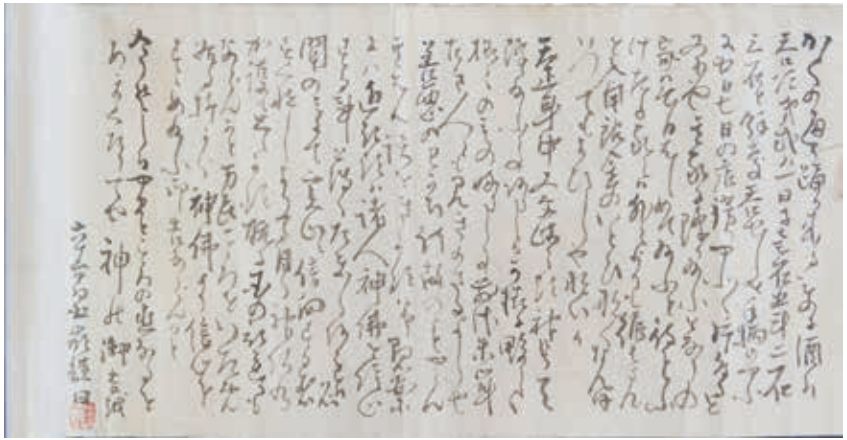
くらま炭
壱俵

白砂と
壱斤

黒砂と
壱斤



今卯年夏入梅後晴雨順気
能、土用中てり強く田面の出来
何国も稲の柴かり根をかく程の
出来、盆後八朔秋の中すべて
御天気能、草木すべて実のり
平年より倍々ありて、くだ物
青もの何壱つ不出来といふ事
なく二百十日廿日無難九月中
上天気、初冬益々天気つゞき
禮仕舞早々諸人よろこびける
新米直段先々平年の直段
にハならず、されど四五月頃の
天井直段とハ壱石ニ付壱貫目
も直安となる、こゝに九月の
中頃より不思議事あり三河の
国に神号天降る由、遠州、美の、
それより追々、大和、河内、大坂近在
南山城、宇治、木わた、十月中旬
京都ニ降出ス、夜となく昼と
なく樹の枝、柴垣、高塀、屋根先
天照皇大神宮を始めとして八幡
大菩薩、祇園、稲荷大社、天神、
地蔵大日、六字名号、疫除御札
（禍カ）
錺難除御守、石佛木仏念佛、
小別一軒に三度五度諸々の
神号うけし家々よろこびて
すぐに神棚しつらいて笹を
たて御酒を備へ、かゞみ餅其
外に近所隣家親類よりも
品々を供す、先壱町内ニ三軒
五軒大家小家のきらひなく
よろこびの踊り始りて、さて
おどる程に〳〵、老若男女、尼法
師、醫も坊主も、車引たゝ往来
の旅人も踊らにや通さぬ有様ハ
前代未聞



かくの通り踊り来るものに酒ハ
呑次第、或ハ一日に壱石五斗二石
三石と餘慶呑セしを手柄のやふ
に五日七日の店銭り、やふ〳〵片付ると
又もや其家に降り給ふ、となりの
家ハ今日はじめて給ふと待とふ
けたる家々ハ外々よりも賑はさん
と入用銀金のいとひなく、なんぼ
いつても、よひじやないか
天正年中、又、文政之頃神号天
降り給ふ事ありしが可様に夥しく
様々のものありし事前代未聞
古き人ニも見きかざるよし也
善悪のわかち何故のことやらん
其はん談をきかず予愚案
にハ近き頃ハ諸人神佛を信心
する事薄く、たま〳〵あれハ名
聞のミにて実正ニ信向する者
すくなし、よりて自ら神仏の
加護もとゞかず既に国の乱れりも
ならんかと万民こころをいため
居る折から神佛より信心を
すすめ給ふ御告ならんかと
今ぞしる、やまとこころの直なるを
あまくだりてや神の御告を

六十二翁五嶺謹曰　印